

2020 Beyond Invisible Borders
kyodo 20_30 Archive
Group 04:

環境

「環境」をキーワードに対話をスタートした私達は、所与の条件としての時間に注目しました。私達は知らず知らず社会のプレッシャーを受け、言わばスピードを上げ続ける電車に乗っています。いつの間にやら乗っていて、乗っていることすら気づけない。そんな電車をちょっとでも降りてゆっくり眺められる方法とは……問い合わせながらアクションにつなげるべく、私達自身も協働の方法自体を模索してきました。それは、会いたくても会えない緊急事態宣言下において、新しいコミュニケーションの回路を開き、身体を通したつながりを取り戻すための挑戦でもありました。

この冊子は私達の思考と試行の記録であり、手に取ってくださったあなたへの提案です。環境が違っても、私達は境をこえてつながれる。あなたとあなたの大切な人に、よい時間が訪れますように。

Team:

環境

Member:

綾田將一
寺門信
柏原瑚子
真壁遙

環境チーム メンバー紹介

綾田將一



kyodo 20_30 コラボレーター。

俳優。早稲田大学第一文学部在学中に演劇活動を開始。reset-Nを経てフリーランス。terraceでコミュニケーションワークショップ。ピースセルプロジェクトでイラクの平和教育支援。フランス・シンガポール・マレーシアなど多くの国際共同制作に取り組む。近年は劇団鳴309やTheatre Company shelfなどに客演。今回TikTokで『#60秒でできること』なる人体実験を敢行。速さに抗ってみました。猫とお風呂が時間忘れさせてくれます。お気に入りのスニーカーと自転車があればどこまでも行けそうな気がします。旅芸人になりたい。

TikTok: @shoichiayada



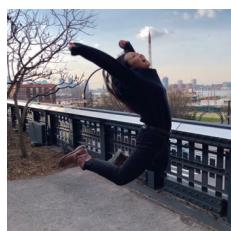
寺門信



kyodo 20_30 コラボレーター。

修士（文学）。大学院を卒業し、プロフィールとして書くことがほとんどなくなってしまいました。数ヶ月先の状況もなかなか見通せないご時勢ですが、それでも読むことと書くことは続けていたらと考えている今日この頃です。旅と批評をテーマにした雑誌『LOCUST』の編集部員です。最近は本をたくさん置ける物件がほしいと思っています。

柏原瑚子



kyodo 20_30 プレイヤー。

1998年東京生まれ。江戸川区出身、22歳。幼少期よりドラマメソッドで英語劇に触れる。高校在学中に1年間ニュージーランドのバーンサイド高校でドラマ、コンテンポラリーダンスを学ぶ。大学では美術史・視覚文化を専攻。東京学生英語劇連盟(Model Production)にて舞台美術、舞台監督を経験。ヴェネチア大学留学中パフォーミングアーツ・ライブアーツを学び、帰国後友人と共同主宰で映像演劇や個展を企画・運営する。趣味は再生栽培と長時間の半身浴。お散歩歴はかなり長め。

真壁遙



kyodo 20_30 プレイヤー。

福島県会津出身。玉川大学芸術学部パフォーミング・アーツ学科卒業。大学でコンテンポラリーダンスに出会い、身体の不思議さに興味を持つ。現在はダンスカンパニー関かおりPUNCTUMUNに所属して自分の身体について探求中。在学中ダンスの見方を勉強するうちに、アート分野に興味を抱くようになり、卒業後も継続してアート活動をし続けたいと思っている中でこのプロジェクトに出会った。最近はコーヒーを淹れることとランニングにはまっている。コーヒーのお湯を注いでできるブクッとしたのを見るのが好き。

分科会までのプロセスを振り返って

寺門：今回、グループに分かれる前の振り返りを座談会形式でしようとなったのは、一人ひとりがつらつらと振り返りを書いてあまり面白くないと個人的に思って、それであればみんなで話しながら、「こんなことありましたよね」とか、色々と思い出しながら話せたらと思いつくような形にしました。ひとまず僕から話題を振ると、**柏原さん**も**真壁さん**もプレイヤーが加わった9月からの参加ではなかったと記憶しているんですが、いつ頃からいらっしゃったんでしたっけ。

真壁：私は『東京リトルネロ』（社会的少数者のコロナ禍における生活を追ったドキュメンタリー）を観た回が初参加ですね。

寺門：そういえばそんな回もありましたね！ 秋ぐらいでしたっけ。

柏原：私もその回、オンラインで参加してました。

綾田：『東京リトルネロ』を観る前は、「私はこういうことを考えています」みたいな、自己紹介を繰り返していたよね。そしたら二人とも、自己紹介は見ていないということですね。

真壁：そうですね。初回で観た『東京リトルネロ』がけっこうハードな内容だったので、「このプロジェクト、ついていくかな」という不安が最初はありました。

寺門：プレイヤーの募集要項はけっこう間口を広くして、国際協働だけでなく、創作自体に興味がある人も募集します、という感じでしたよね。**真壁さん**にとっては創作をすることが参加の動機として大きな理由だったんでしょうか。

真壁：創作はしたいけれど、自分が何かを発信することにすごく苦手意識があって。なので誰かと協力することで、ちょっとでも発信であったり、表現する方向に繋がっていったらいいなという思いがあつて参加してみたという感じです。それと、日々の生活の中にアートを入れ込むのが、自分のやり方ではけっこう難しくて、プロジェクトでいろんな人と関わることで、大学でアートに触れていたような時間を補っていきたいという気持ちもあって、新しいコミュニティというか、いろんな人と出会って繋がつていけたら面白いのかなと思って参加しました。

寺門：それでいうと**柏原さん**はいま大学にいらっしゃって、おそらくゼミとかでアートや文化の話題に触れる機会はあって、そうするとこのプロジェクトで制作をやるであったり、アートの話をするみたいなことが**真壁さん**とは違うように見えていたり、感じていたりするのかなと思ったのですが、プロジェクトに関心を持ったきっかけとかはどんなものでしたか。

柏原：私は大学で美術史とか哲学とかの講義を取っているので、そういう分野の話を他の人と話す時間はあると思います。あとヴェネチアにいた時にも、周りにそういう話をできる友達がけっこういて、自分の知識や考えを深めることはできたんですけど、それを作品にする力が自分にはないと思っていた、今まで考えてきたこととか、社会とかコミュニティに対して思っていることとかを、うまく作品にする機会がほしいなと思ったのが、このプロジェクトに参加した理由の一つです。どうやったらうまく作品化できるか、どうしたら観てくれている人に自分が思っていることや考えていることを効果的に伝えられるか、いつも考えるんですが、多分私はそれがすごく苦手で、そういうことをいろんな人と話す中で、できるようになっていけたらいいなと思っています。

寺門：制作という点では**綾田さん**やぶりちゃん（コラボレーターの野村プリシラさゆりさん）のワークショップがあったわけですが、例えばお二人とも参加したぶりちゃんのワークショップをやってみた感想とかはどうでしょうか。あるいはこのプロジェクト全体で気づいたり感じたりしたことがあれば伺い

たいです。自分の話をすると、例えば**柏原さん**や**真壁さん**と僕は半年前にはお互いの存在すら認識していないなかったと思うのですが、そういう相手と、とりあえず何かを作るという目的を介してコミュニケーションが生じているのは面白いことだと思っていて、それは僕にとってこのプロジェクトに参加してみてわかったことでした。

真壁：もともと色々なワークショップに参加するのが好きなんんですけど、今年はコロナのせいで参加する機会があまりなかったので、単純にみんなで同じことができるのがまず嬉しかったです。ワークショップに参加するたび思うんですけど、自分の中で何かをやることに対するハードルが勝手に高いんです。みんなで絵を描いてみようということすら、すごく目的とかを考えてしまって。一枚の紙にみんなで線を一本ずつ引いていって、みんなでそれを切ってさらに繋げてっていう、作業で言ったらそれだけなのに、私はけっこう、一つの作品にするまでの過程でいろんなことを考えて、すごくハードルを高くしてしまいがちなんです。でもこのプロジェクトでワークショップに参加してみて、創作っていろんなところに転がっているというか、良い意味でそんなにハードルも高くなんだなってことを改めて実感しました。

寺門：「創作はいろんなところに転がっている」、めちゃくちゃ良いフレーズですね。

綾田：ハードルが高くなっている実感を持った、具体的な瞬間はあった？

真壁：とりあえず線を入れることによって、意味を勝手に持つというか、まずやらないと何も影響が生まれないんだなというか、やったら見えてくるものもあるなと思った瞬間ですかね。創作するための準備もある程度は必要だと思うんですけど、自分が予想していることの範囲外のことの方がきっと多いだろなと思って。予想を超えたところを楽しみたいのに、なかなか踏み込めないところがあったんですけど、みんなの絵とか線を見ていると、みんなが描かない始まらないし、そこから見える面白さがいっぱいあることに気づいて。いつか自分でワークショップ開いてみたいと思ってるんですけど、こういうことしたらこうなるだろう、みたいな道筋ばかり考えすぎていたのかな、と。

綾田：ゴールを明確にしそうていたというか、固執しそうていたというか。

真壁：自分だけで気づけないことに気づくという点でも、やっぱり人とやるのって楽しいですね。**綾田さん**のワークショップにも参加したかったです。

綾田：いつでもやるよ！

真壁：それこそどんなワークショップだったんですか？

綾田：全員対面で集まって初めの日にいきなりやったワークショップで、身体表現を使って創作をしたんですよ。kyodo 20_30全体の流れを、僕なりの身体表現のワークショップでギュッと、2時間くらいに詰めようと思ってプログラムを立てていて。最初はみんなでコミュニケーションを取り合ったり、場に慣れたりするためのゲームをやって。お互いに初めてだけど、その間の壁を取り除いたり距離を縮めてみたりしようというのをやってから、まずは小さい、二人一組から、とにかく無理矢理身体を動かして、何かの形を作つてみようという、創作に慣れていくみたいなステップがあって、そこにちょっとずつ話し合いが入ってきて、「東京」の形をこれから5人で作らなくちゃいけないから、「東京」を作るための創作の話をするんだけど、でもそのためには「東京」ってどういうものなんだろうという話を同時にしないでしゃいけなくて、話しているだけじゃいけなくて何かしらの形にアウトプットしなくちゃいけなくて、最後にみんなで発表会をして、見合って、その後に今日はどうだったっていう話をする、というワークショップでした。

真壁：面白いですね。普通に自己紹介するよりもお互いに印象が残りそうです。

綾田：「あの時鳥居やってた人だ」「あの時新幹線やってた人だ」というのはすごくダイレクトに、「この人だ」というのが残るんだよね。

寺門：けっこうカオスな場になってましたよね（笑） 梅の木になる人、新幹線になる人、鳥居になる人とかがいて。僕は未来の東京の、空飛ぶ山手線になりましたりしていました。

綾田：そのワークショップの後に自己紹介の回が続いて、それぞれが自分のことを話す時間が長くあつたんだけど、でも自分のことばっかりに向き合っていたら作品は作れないよねということで、『東京リトルネロ』をみんなで観て、今度は内の世界から外の世界に目を向けてみようよという風にプログラムを進めていたんですよ。ちょうどその頃に、二人とも合流したことだよね。

柏原：『東京リトルネロ』を観たり、海外ルーツの方のご家族の話を聞いたりして、私は日本で移民の人と会うとかぜんぜんそれまでは考えたことがなかったので、日本で実際にそういうことが起こっていることとか、体験している人が身近にいるんだなということに気づかされるきっかけだったように思います。ぷりちゃんのワークショップに参加した感想は、けっこう集まっている人がみんな、変な人が多いというか、個性的な人が多いなと感じました（笑） 街を歩いていたらわからないけど、きっとみんなぜんぜん違ってみんな超個性的だし、そんなの別に、国が違うから違うということじゃなくて、同じ国民でもみんな多種多様で、ぷりちゃんのワークショップでも、「描いてある上に、そのまま消すように描く人がいるんだ！」とか、「そこの！？」みたいなことをやっている人たちを見ると、改めてそういうことを気づかされました。

綾田：それは、今まで会ったことのないタイプの人がいる場所に来たという感じかな。それとも、今までそういういろんな人が周りにいたかもしれないけれど、そういうことは考えてこなかった、気づいてなかったという感じなのか、どっちでしょう。

柏原：私の場合で言うと、割と英語が好きな人とか、ミュージカルが好きな人とか、何かの繋がりがあって集まっている団体に所属するとかが多かったんですけど、今回は、留学前の自分だったら参加しないようなところに参加していて。いつもいた場所から離れる、出てみることも大切だなと思ったので。

綾田：そこは僕も同じかもしれない。芸術について話す相手とか、そういう環境はなんとか手に入れてきたし、それを作品に繋げることも続けられるようになってきたけど、やっぱりなんだかんだ、どうしても演劇を作る人との関係が濃くなっちゃうから、そうじゃない、違う目的を持って集まる場所とか、そこで会う人がいるとかっていうのは、やっぱりいつもの環境とはちょっと違う発見があるような気がするな。

真壁：ああいうワークショップって、ある意味で個性が見えて面白いですよね。自己紹介していないからかもしれないんですけど、あの入ってこういう線を描くんだなとか、ちょっと性格が垣間見えるとか。描かないという選択肢も、ああ確かにありだったなとか（笑）

綾田：僕はあれだけ自己紹介してもらったり、ディスカッションとかしてきたのに、みんなの名前がぜんぜん覚えられなくて、あの絵を描くぷりちゃんのワークショップの日に一気に全員覚えたんだよね。「この人はこういう人か」という、姿形と名前があの日に結びついたというか。ワークショップの進行上、意識的に人の名前を呼び続けたことも関係あるかもしれないけれど。この人はこういう人っていうのが、あの時にふわっと入ってきた感じがして。それでまさに、顔と名前が一致するというか、身体と顔が一致するみたいなことが起こったのがあの日だった。

寺門：描いている本人が普段あまり見せようとしていない個性も出でている部分はありましたよね。僕も自分で描いてみて、自分に対して頭でっかちだと感じた部分があって。線を描くのをコンセプト先行でやろうとしていて、ただいざ描いてみるとあんまり面白くないぞ、というのを我ながら感じる部

分があって。そういう自分の一面、言葉で自己紹介する時には隠せてしまう一面が、絵を描く時とかには出てしまうといったことを感じたりしました。

柏原：そういうればキーワード選びがあって、その後それぞれにチームわけがありましたが、皆さんはないで環境チームに配属されることになったんですか？

真壁：なんか紙がありましたよね。

綾田：あった！ マインドマップみたいなやつだよね。そこからプレイヤーは一人ずつ、何個か言葉を選んだんだよね。

寺門：そうですね。それで最終的に、「環境」に近い言葉を選んだ人がここに集まっていると。僕はプレイヤーではないですが実は選んだ言葉があって、それは「思想」「法」「儀礼」でした。

柏原：私が選んだ言葉は「世間」「家族」「身体」でした。

綾田：僕も選ぶとしたら、「身体」は絶対選んでいただろうな。

真壁：私は「思想」「共感」「環境」でした。境界というテーマを軸に考えていった時に、最初の話に戻ってしまうのですけど、学べる場所があるかないか、それまでにどういう経験を経てきたかによって、個人個人の境目や考え方方が違うんじゃないかなといったことを、その時考えていたので。

寺門：柏原さんのキーワードの中では、「家族」とか「世間」が環境に近い言葉のように思うのですが、柏原さんの中でそれらの言葉が「環境」チームに関係している部分はあるんでしょうか？

柏原：「環境」に一番近いなと思うのは「身体」で、前にイタリアにいた時の授業で、「環境から感情は切り離せなくて、感情から考えは切り離せなくて、考えから言語が切り離せなくて、人間はそういう環境から、言語から切り離せない生き物なんだ」ということが科学的に証明されてたというような話を聞いて。目の前にいる人がいまどういう状況にあるかって、見たり感じることって簡単だと思うんです。同じ空間にいたら、「この人いま嬉しそう」「この人いま怒っているかもしれない」とか。そういう風に直接的に感じ取れる身体がありながら、言葉を話すってどういう意味なんだろう、なんで言葉ってあるんだろうってことを考えたりして、「身体」という言葉を選びました。あと「国境」とか「境界」について考えると、「こうするべき」みたいなことが日本ではけっこう多いじゃないですか。引っ越ししたら隣の人にお土産を持っていくとか、友達の家にいく時はお菓子を持っていくとか。そういうのよくわかんなないなと思う部分があって。そういう、自分が違和感を感じるもののが「世間」「家族」は、ちょうどその時観にいっていた展示で、ステップファーザーになる人が、新しいパートナーとのパートナーの子どもとの間にできている文化に交われない境遇を告白する映像があって、家族っていう文化がすごく特殊なもので、面白いなと思って「家族」を選びました。

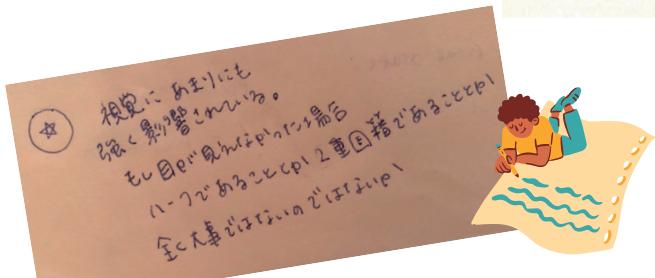
寺門：「環境」という言葉でまとめてはいますが、それぞれの関心はかなり違う感じですね。関心を持った入り口もぜんぜん違うし。環境チームとしてまとめてみて、環境という言葉だったり創作自体に持っているイメージがここにいる四人でもぜんぜん違う。でも、協働で創作する中でコミュニケーションを取ることは現にある程度できている。じゃあそのできていることがどういうことであったり、あるいはそのコミュニケーションをどうより豊かにできるのかみたいなことを、僕らは試みているのかもしれない、いま話を聞きながら思いました。

柏原：その話を聞いて、「環境」って別にぜんぜん違ってもいいのかなと思いました。全く同じ環境にいる必要はないけれど、「身体」を持っていることで入って繋がりあえるんじゃないかなということが、チームで導き出せそうな答えというか、辿り着けそうな場所なのかなと思っています。同じ「身体」を持ち合わせている全く同じ種類の動物として、他者に寄りそうみたいなことって、別に環境や境遇が同じじゃなくてもできることなのかもって思いました。

みんなのメモ

~~劇場如~~ 景觀了嗎同如好正
~~像~~ ~~漫畫~~ 佢復加演技入了暖同如
才正人好世

- ・ C.CO土人の散歩コースを歩いてみる?
 - ・ 今、つく丁言葉を共有してみる?
友換日記のよう?



- ・ 視覚情報の3次元
 - ・ メディアと複数次元アーティシティ

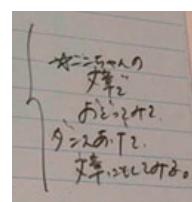
電車から降りて歩く→休憩と共有(外からの視線が入り込む)
お散歩論=電車から降りる方法とは?
人々の交流が自分の人生を、アシートしてくれる
→ 散歩を通して他者とつなげよう

- ・ 意図・目的の感じ：人はどうして何をしたくなるか
ex) 時計の針の音を60回聞く
→ 感じる行為は必ず意図・目的で可決する

自命現実逃避者 / 色人種の「お」

・距離があるのいつかは、では、下驚き！

女娘日記



〈身体をも、心もともにこの世界へ向かう。〉



- ・共有可子文 「(1)か」 意思、下に2行位の
一組にや子・感(1)3
ex) 誰かが鋪巾紙
私の39ジョン代 誰かが39ジョン起来
誰か、一部を自分の一部に33

おめくじ：最初に生産された人。
自分のことを自分で見て、アレアレ
「みんなのためには、やる、いい】(書いてある)」という文

ここのお散歩コース



言葉は常に運動をしている。

日本語は「違和感」を生じさせонтが多い?

- 新しくヨーロッパ-シンの国語を開拓する
誰かを募集します。(ヤマト会議)

→ 時間、度(方)

~~ツールが変わること~~

1. ~~動機~~ → そのため準備

皆殺し車。ひきものとらえよおぎ。
街に迷子にはまくはまくはまく
しゃうじゆ帰るひのくふる。

スピード感に抗ってみる

お散歩：時間が必要なこと、時間をかけたいもの、かけてこそわかるものがお散歩には詰まっている

離れていても時間だけは一緒に過ごすことができる
人と私の感覚の違い、それをシェアした時の喜び
自分のお散歩だけじゃない、誰かのお散歩への興味
経堂周辺を1人ずつ散歩してみる

視覚情報

散歩体験：ゆっくりとした時間を取り戻す

デジタルにフィジカルを差し込む 簡単に物事を済ませられる世の中において あえて時間をかけて手書きで体験を共有する

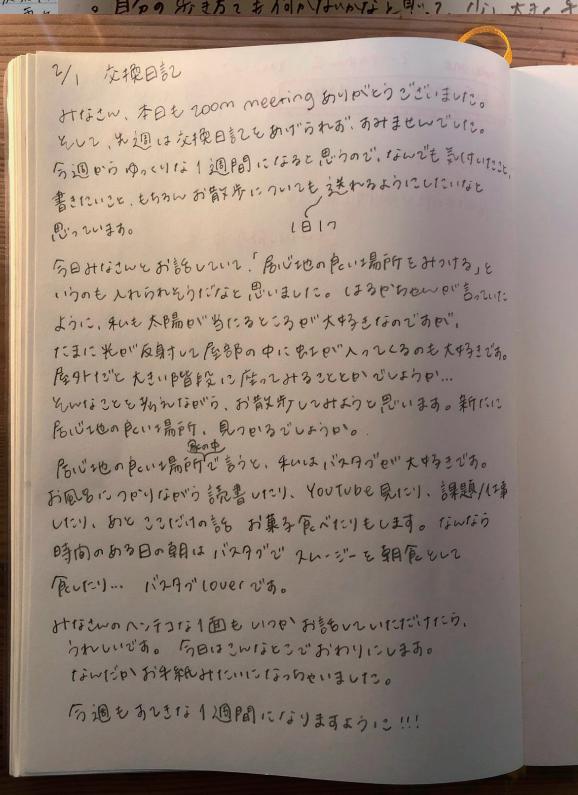
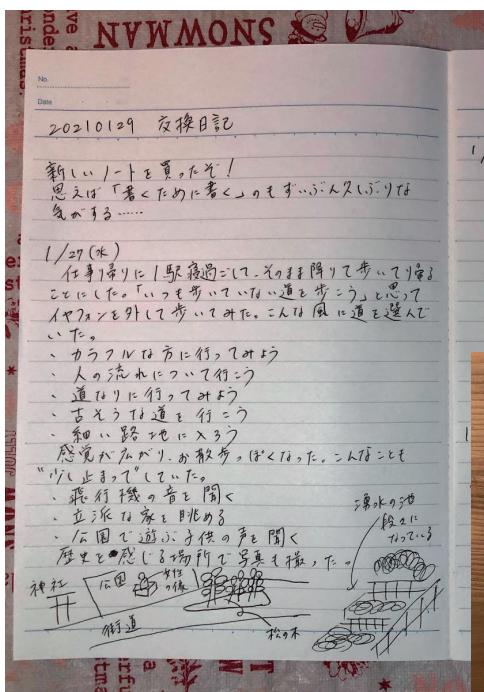
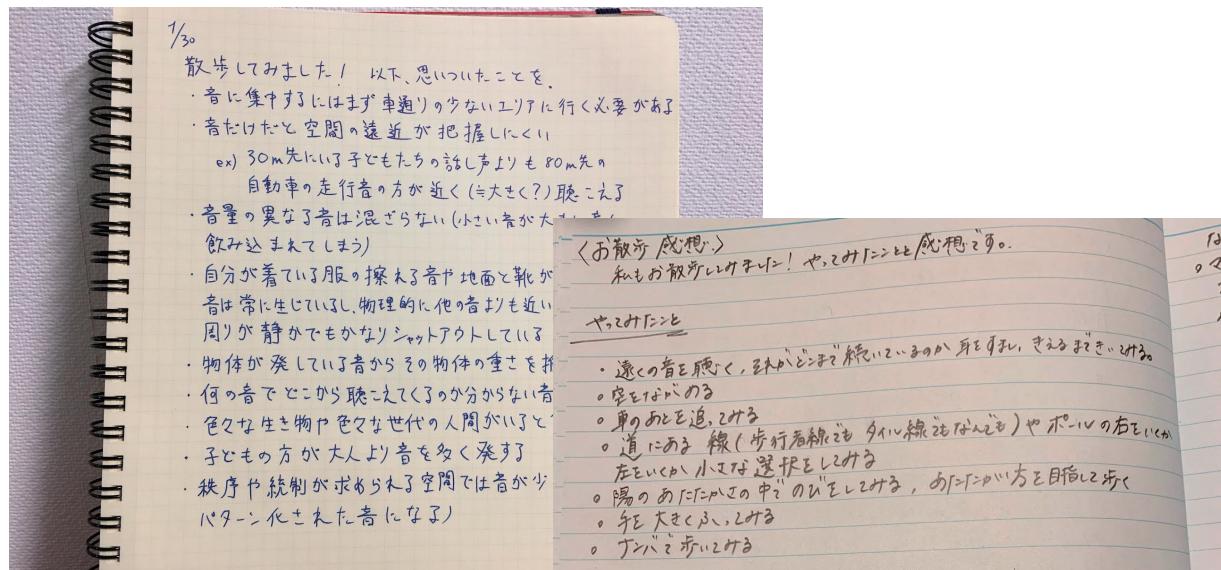
「欲望という名の電車」

電車の比喩
乗っていて気づけない
時間感覚をずらして、その電車から一度降りてみると
その1つとしての散歩

自分だけに閉じた体験ではなく、
他者の目線を入れる→電車から降りる方法としての散歩

お散歩のシェア

言葉の重みの違い



1/1 散歩日記
今日は、本日もZoom meetingがありございました。
しかし、先週は交換日記をやりたがれ、お見せしていました。
今週はやめられない1週間にひらくと思うのですが、なんでもおきつけます。
書きたいことはもちろんお書き方にいつも迷われるようになります。
1月1日
今日はまた地の良い場所であります。今日は太陽が本当に多いのであります。
たまに光り反射している部分の中に必ず入ってしまうのも大好きです。
階段など大きい階段は床の上に歩く気持ちと一緒に歩くのが好きです。
今日はここも歩くが好きで、お散歩がしきよかったです。新規に
高い地の良い場所、見つかりました。

高い地の良い場所であります。高い地の良い場所を歩くと、手のひらが大きくなります。
お風呂のつぶらな形の読書したり、YouTubeを見たり、課題(?)を
したり、あと2つの読書をするのが好きです。なんなら
時間のある日の朝はバタフライスイマーを朝食として
食べたり...バタフライを泳ぎます。

お風呂のベンチから1面もいつでもおもいでいただけたり、
うれしいです。今日は3月はどこかおわりになりました。
なんばかお手入れがいいところがいいです。

今週もまた1週間になりますように!!!

「手紙から手紙の間の出来事」

体験が言葉という表現に
言葉がダンスという表現に

手紙から生まれるアクション

手紙：散歩を通して離れた誰かとつながる

手紙から送り主の体験を想像する

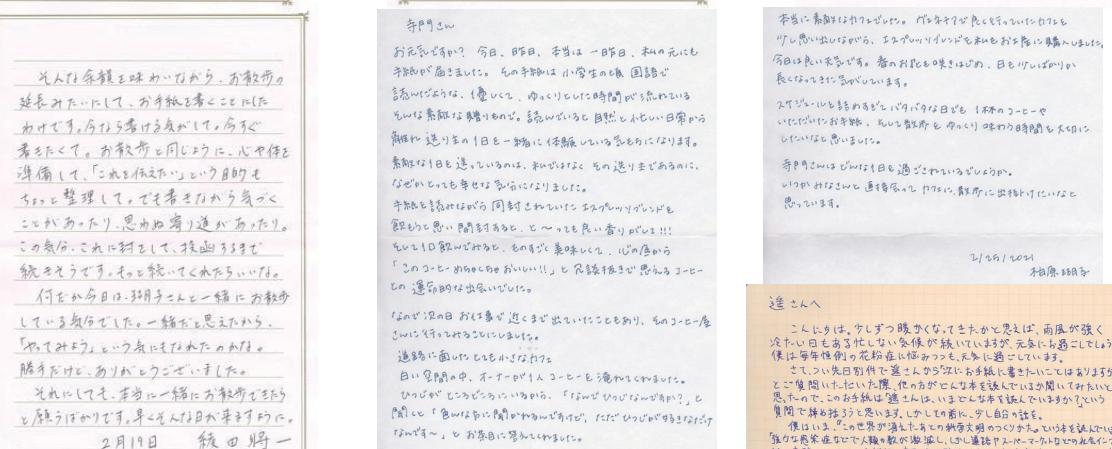
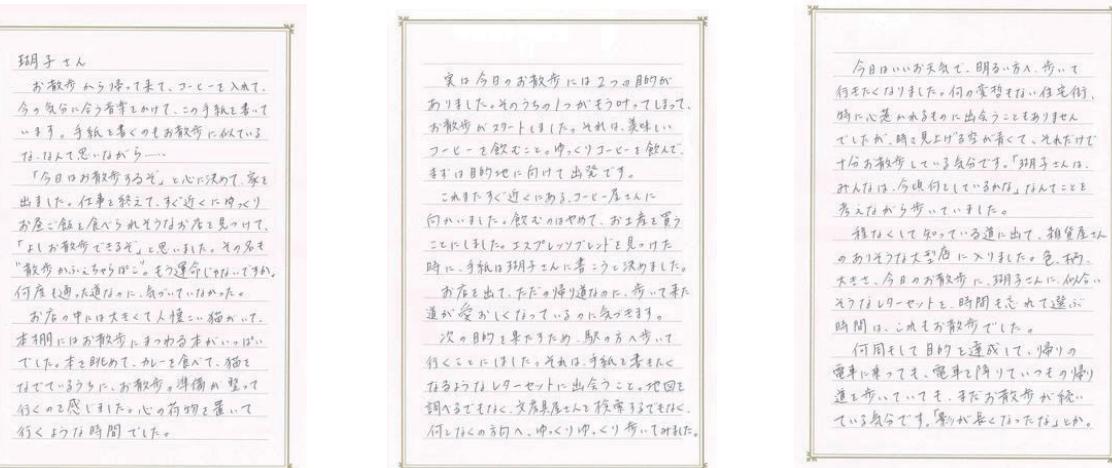
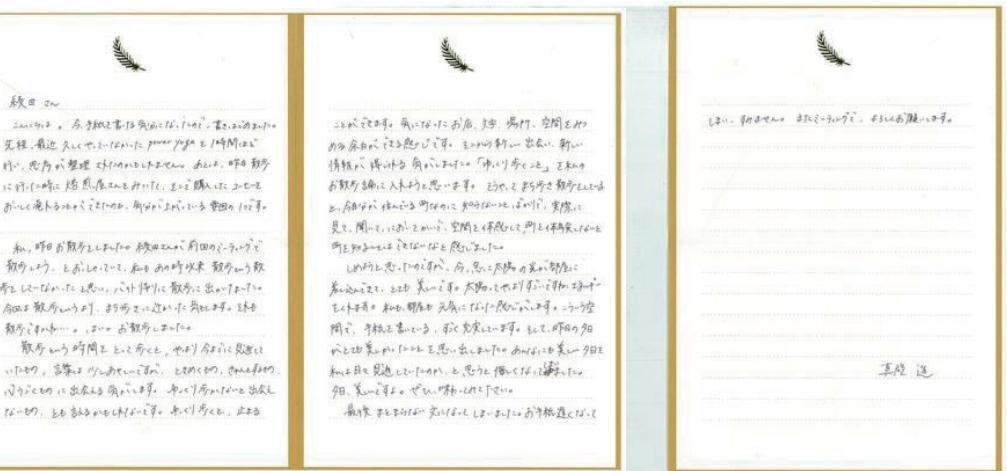
想像の中で一緒に体験してみる

受け取った体験を新たにつないでいく

「見る」は視覚の専売特許ではない
まずは画面という境界をこえたい

空間・環境の共有は必ずしも必要不可欠なものではないのかもしれない
大切なのは相手の表現に寄り添うこと

感情を移し変える



3/3/2021

みんなのお散步論

今ままでお散步をしきに経験からそれを"れが"お散步に必要なもの、大事なものなど「お散步エッセンス」をご紹介！

柏原瑚子のお散步論は... とまること

色々な道を歩いて新たにお散步コースを開拓していくことももちろん樂しいですが、お散步の中で座られる場所を見つければ、しばらくそこに時間を過ごすことがタチです。今日はどんな天気なのかお日様は出ているのか、風はどうにどう冷めたい？暖かい？どんな音が聞こえてくるか。自分が居心地良いと思える日であれば、何かそうさせてくれるところを探していり。環境グレードの中でもお話しにあげましたね外部要素に意識を向けることや、結局自分自身を知ることにつながる気がします!!!

真陸遙のお散步論

1. 持たない
2. 直感を大事に
3. 素直ざる

柔軟な姿勢でいたいの、お守りとクリアカードだけで持て、とりあえず外に出ます。気にする、と少しでも感じた時に引かかって大事にして、気には、でもものに対して観察できる状態でいます。あと、自分の感情に素直になれ、ひとり話にめぐわず言います。

外にも内にも観察の目を向くように全身の身を澄まして状態で愉快に歩くことが私のお散步論です。

綾田将一の"お散步論"

お散步には、

準備が必要だ。

重い荷物を置いて、

心と体を軽くして、

扉を開けて、線をこえよう。

新しく
見知った道で
迷子になります。
迷子にならぬこと。
そこにある
景色や出来事と
出会うこと。

寺門信の
「お散步論」

二人にも聞きたい！

～質問したいと考えた経緯～

プレイヤーの真壁です。

分科会までのプロセスを振り返るなかで、コラボレーターのお二人の考えもう少し掘り下げて聞いてみたい！と思うことがありました。

プレイヤーとコラボレーターの境なしに共通のプロジェクトへ向き合ってきたように感じるので、プレイヤーと同じくらいコラボレーターのことも知りたいと思い、いくつか質問をしてみました。

寺門さん

大学院でアートプロジェクトとかの研究をしていたことと、自分が体験したことのある参加型の芸術作品に、移民・難民をテーマにしたもののが多かったのが理由です。これまで体験した作品というのは、例えば東京の中にあるアジアの痕跡を辿るとか、日本に暮らす移民・難民の方の生活圏を訪れてみるといったものでした。前者の作品では、世界で初めて台湾語の辞書を作った人が池袋にあるお寺に眠っていることや、日本留学中の蒋介石が訪れた中華料理店が神保町にあることを知りました。池袋も神保町も比較的生活圏に近かったので、そんな身近に、こんなにもアジア諸国とのつながりが見出せることに、そしてそのことを自分が全く知らないという事実に驚いたのをよく覚えています。

綾田さん

俳優として国際共同制作や海外公演への参加を重ねる度に、「日本人であることを追究しよう」という思いを強くしてきました。外国で異質な他者と協働していると自分の日本人性を意識させられますし、互いの違いを活かし合うことこそ創作の醍醐味だと考えるようになったからです。より隔たった誰かと協働するためには、もっと日本的な言葉や身体を鍛えなければと思った。なので、外国语を習得して海外に移住するとかでなく、日本でできることを探し続けていて……今回、そういう協働の場を日本でも作りたいという思いが一致したのと、日本人同士でも違いを活かし合えるようなコミュニケーションを生むのに僕の経験が役立つべきと思い、参加しました。

考えたくないけど、もしこのままこのチームのメンバーに会えないままになっちゃったら、みんなにお礼のお手紙を書きたいとなるだろうな。考えたいこととしては、旅先からお手紙を書いてみたい。大きなお散歩だね。

自分以外の人がどんな本を読んでいるかに興味があるので、「いまどんなん本を読んでいますか？」とか聞きたいですね。ちなみに僕は『この世界が消えたあとの科学文明のつくりかた』という、科学文明を一から立ち上げるための本を読んでいます。

Q1

お二人がkyodo 20_30
になぜ参加したのか、
知りたいです！

初期のプログラムで自己紹介がありましたが、私も柏原さんも参加前の出来事でした。

Q2

ずばり、
お散歩をテーマに
することに関して
どう思いましたか？

「行ける！」って思った。このチームらしい、ゆっくり味わう雰囲気に合っている気がしたのと、特に遥さんと瑚子さんのアートとライフのコアに触れるような、ある種の切実さを感じたから。会うことが許されない状況になって、それでも稽古場で集まってするような共同作業ができやしないか考えていて、お散歩なら、リモートでも身体性を高く保って、話合うだけでなく“やってみる”ことができるんじゃないかなって思った。お散歩マスター瑚子さんのお話を聞いて、お散歩コースを持っているだなんて豊かだなって思って。単純にお散歩したいなって思ったし。今思うと僕も、そういう歩くために歩くみたいな時間に飢えていたのかもしれません。

散歩だったら普段創作をしない自分でも取り組めそうだという安心感と、そうはいつても最後にどうやって作品にすればいいんだ？という不安の両方を感じていました。正直言うと不安の方が大きかったかも。。。ただ、実際に散歩をしてみてその感想を言語化しようと試みると、自分が身の回りのことをどのように見ているか色々と発見がありましたし、「車通りの多いところだとやっぱり散歩に集中できないですね～」といった身体感覚に関する感想を他の人と共有できた時、言葉だけのコミュニケーションとは違う一体感が生じていることも感じました。「物理的に会えない中で他の人とコミュニケーションを取るための実践として散歩をしているんだ！」という話がチームのMTGで出た時は、「きた！それだ！」と思いましたね。

Q4

実際にお散歩をして自分の生活で変化したり、
影響したことはありますか？

通勤など定まった経路での移動ばかり繰り返していると、自分の身体が出来る振る舞いも硬直化してしまうのかも、といったことを考えました。散歩のために散歩すると、「自分でこんな風にも歩けたんだな、こんな風に身体を動かせたんだな」といったことに気づくと言いますか。

Q3

お手紙、
私は久しぶりに書いたので
なんだか特別感があってワクワクしました。
次にお手紙に書きたいことがありますか？

情報を遮断して、気づけない心と体になってしまわないよう気をつけなきゃと思います。もっと街を知って、行動範囲を広げたいって思った。あと逆に、お家の時間も居心地よくしたいなって思うようになったかな。

■kyodo 20_30 環境チーム 経堂万(国)博覧会 アクションプラン

●日時

2021年02月27日(土), 28日(日) 16:00-18:30 日の入り17時半頃…時間の移り変わり

●会場

経堂アトリエ/周辺の街 /日の前の公園
(発着地)

●対象

4~6名
電車に向かって座るくらい

●趣旨

人によって歩く道が変わら...外→内に目を向ける

多様な解釈の可能なコースをデザインしてからお散歩に出かけることで、身体感覚を広げ、ゆっくり自分に向き合う時間としてのお散歩を体験する。共同作業を交えながらお散歩のふりかえりを行い、体験を深めるとともに、お散歩を通して他者とつながるためのエッセンスを持ち帰る。空間の共有と時間の共有を切り分かつ横断する過程で、コミュニケーションの質的変化を醸成し、所与の環境についての再認識を促す。

●内容

一緒にやっている 電車を降りてみる

○準備 ウィーニングアップ: 経堂アトリエとみんなのHomeにする

- ・経堂アトリエの中をお散歩してみる
- ・お散歩の種を組み合わせて言葉のお散歩コースをデザインする

例: 日の当たる方へ向かってみる

車の音から離れてみる

さっき気になった道へ入ってみる

軽く伸びをしてみる

ときめいたものに心を置いてみる

居心地の良い場所に座ってみる

空を見上げながら歩いてみる

自分の足音を聞いてみる

大きく手を振りながら進んでみる

・お散歩を持って行く物を選ぶ

・小さないバックやメモできるものを用意してもいいかも

○お散歩 置いて行ってもらえるようにする

.....違う空間、同じ時間

・一人ずつ経堂アトリエを出発してお散歩に出かける

・言葉のお散歩コースにのっとって周辺の街をお散歩してみる

・お散歩が終わったら経堂アトリエに帰って来る「日が暮れる前に帰ってきてね」とか

○つながる時間 想像する お散歩を集め合

言葉による→手を動かす

誰かが 誰かが お散歩を お散歩を

・それぞれのお散歩体験をお喋りして共有する

・みんなで経堂のお散歩マップをつくる

・新しいお散歩の種を考えて発表し合う

本事業は「東京アートポイント計画」として実施しています。東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となるNPOを育成します。

In cooperation with various arts organizations and NPOs, Tokyo Artpoint Project pursues art projects with local community and citizen involvement as a way to foster an environment where everyone can be actively engaged in culture and to create and disseminate Tokyo's charm. The project is organized by the Tokyo Metropolitan Government and the Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture.
www.artscouncil-tokyo.jp

主催:

東京都 |

公益財団法人東京都歴史文化財団

アーツカウンシル東京 |

一般社団法人shelf

Organized by

Tokyo Metropolitan Government,

Arts Council Tokyo

(Tokyo Metropolitan Foundation
for History and Culture),

shelf Association

発行:

公益財団法人東京都歴史文化財団

アーツカウンシル東京

〒102-0073

東京都千代田区九段北

4丁目1-28

九段ファーストプレイス8階

TEL 03-6256-8430

FAX 03-6256-8827

◎アーツカウンシル東京

Printed in Japan.

ISBN978-4-909894-21-2 C0070

All Rights Reserved.

文化でつながる。未来とつながる。
THE FUTURE IS ART

Tokyo Tokyo
FESTIVAL



<https://www.tokyokokkyo.tokyo>